

第3号様式

令和8年度第1回船橋市生涯学習基本構想・推進計画検討委員会会議概要

(令和8年9月29日作成)

- 1 開催日時 令和8年9月1日(火曜日)午後1時30分から午後3時15分まで
- 2 開催場所 市役所 7階 705会議室
- 3 出席者
 - (1) 委員 明石 要一、辻 大士(※)、五藤 美枝子、中原 加代子、草野 滋之、
栗山 裕真(※)、水野 恭成
※オンライン参加
 - (2) 事務局 社会教育課長、社会教育課長補佐、社会教育課職員
- 4 欠席者 竹迫 和代、奥住 恵子、沼波 規子
- 5 議題及び公開・非公開の別並びに非公開の場合にあっては、その理由
・第三次船橋市生涯学習基本構想・推進計画(ふなばし一番星プラン)の後期推進計画骨子案
について【公開】
- 6 傍聴者数(全部を非公開で行う会議の場合を除く。)

0人

7 決定事項

議題について、質疑応答及び意見聴取を行った。

8 議事

午後1時30分開会

○明石委員長

では、ただいまから、令和8年度第1回船橋市生涯学習基本構想・推進計画検討委員会を開きたいと思います。

ここで、会議の公開及び傍聴についてご説明させていただきます。

本会議につきましては、不開示情報が含まれておりませんので、船橋市情報公開条例第26条に基づきまして公開といたします。また、会議後は会議録を作成いたしまして公開しますが、その際には委員の皆様のお名前も公開となりますので、ご承知おきください。

なお、会議の開催につきましては、市のホームページにて開催日時等を事前に周知していることをご報告いたします。

続きまして、傍聴ですけれども、今日は傍聴希望者はいなかったことを報告いたします。

それでは、本日の議事に入らせていただきます。

次第の1「第三次船橋市生涯学習基本構想・推進計画(ふなばし一番星プラン)の後期推進計画骨子案について」でございます。

事務局よりご説明をお願いいたします。まず、安藤課長からお願いします。

○社会教育課長

社会教育課、課長の安藤でございます。説明が長くなりますが、どうぞよろしくお願

たします。

まず、資料1「第三次船橋市生涯学習基本構想・推進計画（ふなばし一番星プラン）概要版」をご覧ください。

まず、1ページ目になります。これは昨年度もお話しさせていただきましたが、基本構想のは令和4年度から13年度までの10年間、前期の推進計画は令和4年度から8年度までの5年間で今年度終了することから、令和9年度から13年度までの5年間の後期推進計画を策定しております。基本構想には基本理念と2つの目標があり、推進計画にはそれぞれの目標を達成するための基本施策を設定しております。

2ページ目、3ページ目をご覧ください。基本施策の内容を整理して、それぞれの施策を整理しております。なお、3ページ下段ですが、推進計画の進捗管理として、各施策対応事業管理表や基本施策Ⅰ・Ⅱのそれぞれに毎年測定可能な指標とその方向性を設定し、毎年点検しております。

最後に、4ページをご覧ください。前期の計画期間で先導的に取り組む必要があると考える内容を明確化し整理した5つのリーディングプロジェクトを記載しております。

続きまして、資料2になります。A3の資料です。これは前期推進計画の状況でございます。資料の左側の部分は、令和7年度に実施した生涯学習に関する市民アンケート調査結果から一部を抜粋したものでございます。

まず、上部の図－1の円グラフでございます。「あなたは、現在、継続して何かを学んだり、活動したりしていますか」という質問に対し、「していない」と回答の方が51.9%でございました。また、隣の図－2の棒グラフ、「あなたは、今後どのような形態や場所で学習したいと思いますか」という質問に対して、「自宅での学習活動」と「インターネット」と回答の方が多いという結果でございました。このことから、学習や活動を行う方を増やすために、「学習形態として、『自宅学習』、『インターネット』のニーズが高い」ということを課題1といたしました。

次に、その下の図－3の円グラフです。「あなたは、この1年間に公民館を含む船橋市が主催した講演会・学習会・催し物に参加したことがありますか」という質問に対し、「知らなかった」と回答の方が53.0%でございました。次に、右側の図－4の円グラフです。「あなたは、公民館で様々な分野のサークル活動が行われていることを知っていますか」という質問に対し、「知らない」と回答の方が37.2%でございました。このことから、「市の主催事業やサークル活動を知らない方が多い」ということを、課題2といたしました。

次に、右側の部分になります。これは、前期推進計画の毎年測定指標の進捗状況です。4つの指標がありますが、Ⅰの①は、市主催事業の参加者数です。令和6年度と令和7年度を比較すると少し下がっていますが、これは、令和5年度、6年度で行われた参加者数が多い単年度事業が含まれているからです。この事業を除くと毎年少しずつ増加している傾向なので、おおむね順調と考えております。

2番目です。Ⅰの②、市生涯学習施設の利用者数です。これは順調に増加しています。

次に、一つ飛ばしていただいて、Ⅱの②、行政以外の主体と連携・協働により行った事業の実施回数でございます。これにつきましても順調に増加しております。

最後に、戻っていただいて、Ⅱの①、地域・社会で活躍する人材・団体数ですが、社会教育関係団体の会員数が減っていることなどから、毎年減少しております。このことから、「地域で活動している人や団体が減少し続けている」を課題３といたしました。

続きまして、資料３になります。ふなばし一番星プランの後期推進計画の骨子案について説明します。船橋市の教育大綱、船橋市教育振興基本計画、国の第４期教育振興基本計画、千葉県生涯学習推進方針を踏まえまして、基本施策のⅠとⅡを整理し、重点的に取り組む必要があるものを重点的施策として設定しております。前期推進計画のリーディングプロジェクトについては、前期計画の期間中に先導的に取り組むべきものとして設定していたもので、後期の推進計画では設定いたしません。

それぞれ説明させていただきます。左の部分が「後期推進計画の体系」です。

まず、基本施策Ⅰとして「社会的包摂の実現と持続可能な社会を目指した学び」を設定するとともに、その下に２つの施策を設定しました。

施策１は、「社会的包摂の実現に向けた学び」として、様々な人への学びという観点で整理しました。例えば、６の「共に学び生きる社会の実現に向けた学び」では、障害のある人の学びなどを位置づけております。

施策２は、「持続可能な社会を目指した学び」として、様々な目的のための学びという観点で整理いたしました。例えば、５の「暮らしに関する学び」では、主権者教育のほか、ニーズの高い防犯・防災等を位置づけております。

次に、基本施策Ⅱとして「学びの成果の活用支援とつながりづくり」を設定するとともに、その下に２つの施策を設定しました。

施策１は、「学びの成果を活かすための環境整備」として、活動につながるためのきっかけづくりや個人・団体の支援を行います。例えば、１の「学びの成果の可視化」では、社会教育課で実施している学びポイント事業をここに位置づけております。

施策２は、「つながりを育む学び・活動の推進」として、地域コミュニティの強化に向けたつながりづくりを進めていきます。例えば、２の「学校・家庭・地域の連携の推進」では、地域と学校の協働活動をここに位置づけております。

次に、右の上部をご覧ください。「毎年測定指標」です。後期推進計画に進捗管理は、基本Ⅰ・Ⅱのそれぞれに毎年の成果を測る指標及びその方向性について設定し、点検してまいります。基本施策Ⅰには、①の市主催・共催事業の参加者数、②の市生涯学習施設の利用者数を、基本施策Ⅱには、①の学びの成果を活かしている人材・団体数と②の地域で活動する人材・団体を育成する事業及び学びの成果を活かして実施する事業の実施回数を設定いたしました。

次に、下段の部分をご覧ください。先ほどお話したとおり、前期推進計画でのリーディングプロジェクトは設定せずに、新たに３つの重点的施策を設定しました。なお、重点的施策

には、資料２の前期推進計画の状況で説明したとおり、３つの課題に対応することを目標に設定いたしました。

まず、重点的施策の１「いつでもどこでもだれでも学べる環境の充実」です。これは、資料２の課題１「学習形態として、『自宅学習』、『インターネット』のニーズが高い」に対応しております。オンラインやオンデマンドを活用した事業などを推進してまいります。

次に、重点的施策の２「生涯学習に関する情報提供及び学習相談体制の充実」でございます。これは、資料２の課題２「市の主催事業やサークル活動を知らない方が多い」に対応しており、情報提供方法の多様化や社会教育人材の活用等を推進してまいります。

最後に、重点的施策の３「地域の拠点『公民館』の充実」でございますが、資料２の課題３「地域で活動している人や団体が減少し続けている」に対応しております。この重点的施策の３は、前期推進計画のリーディングプロジェクトにございましたので引き続きとなりますが、地域の拠点である公民館の機能を充実していく必要があるため設定しております。

次に、資料４です。Ａ３の資料です。ふなばし一番星プランの骨子案に係る体系図で、基本構想の理念・目標や前期・後期の推進計画の施策や指標を掲載しております。参考にしていただければ幸いです。

最後に、資料５でございます。今後のスケジュールです。本日の検討委員会以降、いただいたご意見などを取りまとめ、１０月頃までに素案を策定します。１２月中旬から１月中旬にかけてパブリック・コメントを行い、３月に計画を策定する予定でございます。なお、検討委員会のほうは１０月と令和９年２月に開催を予定しているところでございます。

長くなりましたが、説明は以上でございます。よろしくお願いいたします。

○明石委員長

安藤課長、ありがとうございました。

今、事務局のほうで資料に基づき説明がありました。これから各参加されている委員の皆様のご意見をいただきますけれども、基本的に今日出された資料３がうまく整理できているかなと。この辺を中心にしながら各委員の方々のご意見をいただければと思っております。とりわけ、資料３の重点的施策というのがございます。今日の勘どころは、この３つの課題について何かいいプランが出ればという感じはしております。それ以外でもよろしいですから、各委員の方々にまず何かご質問、ご意見がありましたらお願いいたします。

まず若い人から、栗山さん、オンラインでしようけれども、何かご意見ございますか。

○栗山委員

全体的に重点施策１、２、３とも課題に対して解決の方向性としてとてもいいなとは思っているのですが、人材・団体の減少が続いているというところで地域の拠点として公民館を充実させる、前期のほうでリーディングプロジェクトに掲げていた公民館の充実を継続してまたやるということになっていると思うのですが、その前期のところとの違いというんですか、今回後期に変えるに当たって、その辺りのところをどんなふうに変えていくのかなというところが、いまいち自分のほうがまだ全部が全部を読み取れていなくて、どうなのかなと

は思っています。

○明石委員長

ありがとうございました。とりわけ重点施策1の「いつでもどこでもだれでも学べる環境の充実」ですね。

今回のデータで興味深かったのは、自宅学習とかネットを通した学びがしたいんだと。そうすると、これまでの船橋市の生涯学習の学びがそれに対応できていたかどうか非常に疑問だという、相当発想の転換をしない限りこのニーズに応えきれないという感じがしておりますよね。ですから、以前水野さんも提案されましたけれども、やっぱりネット社会の公民館とか図書館とか、そういう新しい学びの方法をつくっていかないと、ただ公民館とか学習センターに来てくださいとか、高齢者講座に来てくださいだけでは、このニーズに応えきれないという感じがしますよね。

今日の新聞でも、文科省の中教審で情報教育というのがものすごく脚光を浴びてきてまして、中学校では週2時間くらいの情報と技術の教育課程が出てきますよね。小学校でも「総合的な学習の時間」の中で情報教育を取り入れる案が出てきます。もう学校教育のほうは情報の教育の先取りをしているのだけれども、社会教育のほうで果たしてこういう自宅学習とかオンライン学習とかネット学習に対して対応できているかどうかというのを、水野さん、何かご意見ありますか。非常に貴重な意見を出していただいているのですが。

○水野委員

私のほうで考えていたのは、学びの場をつくってくれたり、それが時代についていけるのかなとか、そういったことの検証はもう大分し尽くされたのかなと思っています。学びたいと思うのは、自分に余裕があったり、向上心があったりするときに発生するものであって、一般市民が朝起きて働いて、夜家に帰って寝るという生活の中にどう取り入れるかという、学ばざるを得ない状況にある人たち、これはやっぱり学生だと思うんですよね。若者を客寄せパンダで使おうとしている自治体が日本中ごまんとあるのですが、若者に来て何か助けてもらおうとか、そういった発想自体が若者を遠ざける原因にもなっているので、前回、デジタル公民館をつくって垣根をなくすというところの話をさせてもらったと思いますが、まず必要としている学びを、年を重ねた人がやるというところに着目しているから駄目で、全員が学ぶ場所ということにしないと駄目だと思うんですよね。それに対応するようにしていると思うんですけども、それに対して若者を毎回客寄せパンダにする、若者が来れば全て万事オーケーだという発想、これをまずやめて、若者が実証実験できるような場所も提案する。

要は、AIが今流行っていると思うのですが、AIは、壁打ちをして、話をして、絵を描いてもらって、動画をつくってもらい便利なものですが、やはりリアルな意見って全然持っていないんですね。例えば、我々が先輩と呼んでいる人たちは昭和のデータセンターなんですよ。このデータをものすごく活用できるのが公民館なのかなと思っていますので、AIで地域の問題を解決するという課題に若者を取り込んでもらえれば、そうすると自然と地

域に溶け込んでいく。地域の意見を聞くとしたらネット社会に転がっていない昭和の話、実体験、これを組み合わせていくことでかみ合っていくのかなという構想をちょっと練っています。ちょっとまとまりませんが、こんな感じです。

○明石委員長

大事なお指摘ありがとうございました。

いろんなデータがありまして、30代と50代の方が一番学習したいというデータがありまして、30代は行政・企業の中堅どころで新しい学びをしたい。50代前半というのは60歳から65歳の定年を見据えると、次の学び直しというカリキュメント教育、人生100年時代を次にどうやって生きていくかという2つ山があります。

もう1つは、今日皆さんおっしゃるように、若者全体の学校教育だけでなく自分で生成AIを使いながら工夫しながら独自の学びが今後たくさん増えてくると思うんですよ。それに対して社会教育はどんなコンテンツを提供できるかというのが大きな課題かなと思います。

個人的には、65歳から75歳のこの10年間、食べていける仕事を探し、例えば教員でも公務員でも65歳で一応定年でもう終わりという意識が強い。その次を考えていないんですよ。余った時間は年金と公民館で学ぼうかなぐらいしか思っていないくて、65歳から75歳のこの10年間でいかに食べていける仕事を探すか」という発想はなかなか出てきていません。

そうすると、やっぱり資格を取得する問題とか、その仕事がちょっぴり社会貢献できるのか、そういう形が欲しいかなと思います。例えば100歳以上の方は現在で約10万人いるんですよ。そうすると、これから100歳までの人生において、やっぱり食べていけるという、学び直しをして、資格の取得につながったり、起業をする道につながるのか、そういう情報提供を社会教育で出していけないと駄目だろうなという感じがしております。言いたいのは、若者の対象と65歳を終えた方からの学びをどう保障していくか、です。30代と50代は学習ニーズが高いから、自分で学んでいるということがあると思います。皆さん、ありがとうございました。

では、五藤さん、新しい学びをどう対応するか。

○五藤委員

私もさっきの「いつでもどこでもだれでも学べる環境の充実」と言いながら、じゃあ自宅学習できる人はどの世代の人が自宅学習できるか。今勤めていても自宅でオンラインで仕事している人もたくさんいますけれども、でもまだまだ自宅でできない。特に年を重ねると、私もコーディネーターをさせていただいているのですが、コーディネーターでオンラインで入って、私はもうずっと仕事でやっているから全然これだと思うけれども、やっていない方にとってはハードルが高い。パソコンを開けたり携帯を見れても、例えばZoomで勉強するとかZoomで相談するというのはなかなか難しいので、いつでもどこでもだれでも学べる環境というのをある程度整えないと。

それと、今、若者も年齢重ねた私たちも、コミュ力がない、コミュニケーション能力がな

いということで、それもさっき水野さんの話ではないですけども、若い人に教えてもらうのではなくて、若い人に足りないところを我々が少しでも役に立ったり、また我々が分からないところを——さっき私もチャッピーを使ったりジェミニを使ったり、壁打ちしていつ、打っているうちに何を打っているのか分からなくなったりの繰り返しなんですけど、壁打ち相手、教えてくれる人がいるからこそやっていける。

それは職業として仕事を持っているからやれるんだけれども、自分と同じくらいの年齢のシニア層で、行きたいんだけど足痛いから行けないと。じゃあオンラインで入ろうよと言ったら、それだけでハードルが高くなってしまう。家に息子がいるし孫もいるんだけど、じゃあ息子や孫が壁打ちの相手になってくれるかといったらなかなかそうはいかないということなので、重点施策の1番のところ、まずここら辺を、誰にターゲットではなくて、みんなができるようなことを考えていくことが必要だと思います。

公民館は、私も講師をさせていただいているので、例えば何か一緒につくるとか食べるとかももらえるというのは、非常にみんな関心が高くてすぐ満席になる。それから、誰か来て歌うとか聴くとかというのもすぐ満席になるんですけども、逆に勉強しましょうよというのはなかなか満席にならないという現実があるので、そこら辺ももっともっと考えていくべきことなのかなと思います。公民館までまず来てもらえるのかどうか、公民館に来た人がまた満足していただけるのかどうか、この3つの施策については、私自身も自分が講師であり、それから、私は今年77なんですけど、仕事を続けている自分として、これからもっともっと自分も考えて、役に立てることは何なんだろうということを思っております。

○明石委員長

ありがとうございます。水野さんと五藤さんの意見を整理しますと、自宅学習とかネット学習というのは、チャッピーとかジェミニとか生成AIで自分ですぐ回答が出るんですよね。それで満足しない方に対して社会教育はどういう学習コンテンツを提供できるか。ですから、自宅学習したものでも、こぼれ落ちた疑問なり新発見に対して、公民館等がどういう学習コンテンツを提供できるかということを考えていかないと難しいかなと思っております。

中原先生、小学生、中学生が、まず公民館を知っているか知っていないか、一か月に公民館に何回くらい行っているか、そういうデータありますか。先生の経験でもよろしいですけど。

○中原委員

数値は分からないのですが、うちは湊町小学校で、公民館、老人福祉センターがすぐそばにあるので、子供たちは浜町公民館によく遊びに行かせてもらっているようで、公民館の館長さんからたくさん来てくれていますよというお話はもらっています。ただ、中で何か勉強会だとかそういう催しがあるから行くというよりは、ふだんの居場所として利用している子が多いのかなという感じです。あと、他校でも部活動とかで呼んでいただいたり、ふれあいフェスタなどで吹奏楽の子たちが発表したり、そういうことでのつながりはあると思って

います。

○明石委員長

1番と2番と関連するのですが、要するに公民館を知らない、社会教育の事業とかをあまり知らないというか、そういう人が多い。例えば高校生、中学生は、夏休みは中央図書館とかは冷房が効いているから勉強に行きやすい。だけど、果たして中学生、高校生は公民館に行っているか。そういうデータが欲しい。図書館には行くんだけど、公民館に仲間と一緒にたまろうということはあまりないですかね。湊公民館というのはあるんですか。

○中原委員

うちの学区の公民館は中央公民館です。ただ、浜町のほうがちょっと近いみたいで、浜町公民館には行って集まっている子たちはいます。社会の学習で公民館についての学習をしています。

○明石委員長

それは小学校3年生でやりますよね。

○中原委員

生活科での地域の学習の町探検の中で公民館の仕事を見学するというのもしています。

○明石委員長

なぜ5年生、6年生、中学生は公民館に行かないのでしょうかね。

○中原委員長

そうですね、大人の中に子供が入っていく感覚というところなのかなとは思っています。

○明石委員長

ありがとうございました。

辻先生、どうですか。重点施策1番で、新しい学び方が増えつつあるけれども、それにどう対応すればいいのでしょうかということです。

○辻委員

そうですね、もう既に出切った意見だと思うんですけども、オンラインの充実というのは一つの選択肢としては充実させるべき事項だと思います。一方で、先ほど委員からもあったように、昭和の方々の積み重ねてきた知見というのは、やっぱり直接お会いしてお伺いするからこそそのものだと思うので、選択肢を増やすといったことが一つ重要な取組なのかなと思っていました。ということでご回答になっていますでしょうか。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、草野先生、何かご意見がありましたら。特にまず1番について。

○草野委員

重点施策の1番「いつでもどこでもだれでも学ぶ環境の充実」、これはアンケート等の結果から見て、インターネット、自宅学習、そういう学びを多くの人が望んでいるということから出てきたというふうに思います。

確かに今のＡＩが非常に急速な勢いで発展しているわけですが、デジタル社会がここ数年のうちに驚くほどの速さで発達し、社会に普及してきていると。一方で、そういう動きに対して歯止めをかけるというか、例えばつい先日の新聞にもありましたけれども、ＡＩがあまりに急速に発達し過ぎる、そういう中で、大げさに言えば人類の危機ということが言われ始めているわけですね。これは決して誇張されたものではなくて、現実としてはそういうことも専門家らの間で懸念されているということで、ヨーロッパとかアメリカとかそういう社会の中でも、ＡＩのあまりにも進んだ開発、デジタル社会の行き過ぎというものに対して歯止めをかける、是正する、どういうふうにコントロールしていくかということが非常に大きな課題になっているわけですね。だから、ＡＩとどういうふうに付き合っていくのか、人類のこれからの幸せとか発展ということを考えた上で、ＡＩをどういうふうに社会に位置づけていくのか、そこが非常に議論があるところです。

確かにデジタル社会なりＡＩというものの効用、メリットはたくさんあるわけですが、少し危険性も含めて批判的に見ていくという視点を欠いたままそういう方向に流れていくというのは、非常に危ういところを感じるわけです。ですから、確かに重点施策の一例で出されていることは大事だと思うし、それが社会教育、生涯学習を広げていく上で大変重要なポイントになっているとは思いますが、一方でそういう批判的な見方というか、そこは欠いたままでいいのかどうかという疑問が私にはあります。

そして、学びという視点からいっても、そういう重点施策の一例で取り上げられていることを強調する中で、学びというものが非常に個人化していくというか個別化していくといいますか、そういう危険性ということもあるように思います。

だから、どういうふうに協働的な学びを実現していくのか。私も大学の授業の中で、コロナ禍のときはそういうデジタル的な手法でやらざるを得なかったわけですが、やっぱり対面学習、対面授業という中に欠かすことができない価値とか役割というのがあるわけですね。だから、デジタル的な学びと同時にアナログ的な学びをどういうふうにつなげていくか。先ほど五藤委員のほうから出たような、私も含めて高齢の年代にとっては、ある種ハードルが高いということもありますし、そこも考えた上で、重点施策１のところに関しては、確かに要望は高いということはあるんですが、一步踏み込んで、もう一度再考していくことも必要なのではないかというふうに思いました。

○明石委員長

ありがとうございました。

安藤課長も新しく課長になられたので、ぜひ考えてほしいのは、船橋市の公民館は今 25 館……。

○社会教育課長

26 です。

○明石委員長

26 ですか。1 館くらい水野さんがおっしゃっているデジタル公民館をつくってみる。要す

るに、チャット GPT とかジェミニでは、個別学習、個人学習というのができるんだけど、仲間はつくっていけないんですよ。だから、デジタル公民館というのはネットで学ぶんだけど、横のつながりというか、草野先生がおっしゃるように、何か疑問をつくとか創造をすとか、そういう意味のデジタル公民館を考えていく。一方では、本当にチャット GPT 系では9割方は答えは正しいかと思うんだけど、大体答えが来るんですよ、すごくいいプロンプトを書けば書くほど。だけど、その答えを理解するときに、やっぱり仲間が欲しいですよ。だから、そういうデジタルの仲間づくりというか、Facebook ではありませんけれども、そういう学びのグループをつくって行って、また新しい提案をしていくのです。そういう意味でのイメージはデジタル公民館かなと思います。1 番の自宅学習とかネット学習は、ツールはスキルアップさせていくけれども、その学びの場をデジタルで提供するという船橋バージョンをつくれれば、どこもやっていない先駆的な試みという感じはしております。

次、重点の2 番目です。今日の資料2 でありましたが、市の主催事業やサークル活動について知らない方が53%です。悔しい。これだけ皆さん頑張っているのに、何で知っていただけないか。これ、栗山さんどうですか。若い人から見て、この53%の数字をどう考えますかね。

○栗山委員

そうですね、知らないという人が53%もいるというのは、正直妥当な数字かなと感じてしまうところがあって、どうしても社会的な構造として、やっぱり我々の世代といいますか、これからの世代という人たちにとって、そもそも市とか公民館であったり、そういうところが主催するイベントに対して、言葉が難しいのですが、どうしてもハードルというか参加障壁みたいなものを感じている人が結構多いのかなという部分があります。それが何でなのかと聞かれると、これはまた言葉が難しいのですが、どうしても堅苦しさというか自由さというか、そういった部分での魅力をそもそも小さい頃に感じていないから、年を取った後に、こういうイベントがあるんだということを積極的に情報を知ろうとか、そういう姿勢にならない限りは正直その情報も入ってこないし、例えば目に入っても、結局その人が興味を持ってくれなければ、だんだん忘れていって、結局知らなかったということになってしまうので、やっぱりそういうところが起因しているのかなとは思っています。

○明石委員長

ありがとうございました。

中原先生、ちょっとお聞きしたいんだけど、近くの公民館まつりってありますよね。例えば浜町でもいいし、公民館まつりの情報が小学校に来ますかね。

○中原委員

チラシをいただいて配布することはあったかなと思います。児童ホームも含めてですけども。コロナ明けはどうだったかなというところはあるんですが。あとは保護者に向けてメールでお知らせをするということもあります。

○明石委員長

例えば、地域の8月の盆踊りがありますよね。盆踊りの開催日は、小学生、中学生も口コミで伝わっていているんですよ。花火大会も結構PRするけれども口コミで来ますよね。実は公民館まつりは地域の盆踊りとか花火大会と同じように、子供たちの社会で口コミがどれだけ行っているかというのは、公民館担当者は調べていただきたい。やっぱり子供にとってはお祭りというのは敷居が低くなっていくんですよ。先生の近くでは、来週の土日は浜町の公民館まつりという言葉は出ませんか。もし出ない場合は、どうしたらいいですかということをお聞きしたい。

○中原委員

前任校では子供の作品を飾らせてもらうこともあったので、子供たちもちろんお祭りについては知っていました。ただ、子供たちが町会のお祭りというイメージで公民館のお祭りを捉えて行けるかというと、そうではないのかなと。公民館のお祭りってもう少し文化的なというか、各サークルの方々の発表など、年齢的にも興味の枠においてもちょっと外れているというところは否めないかなと思います。

○明石委員長

五藤さんはいろいろな講師もされていますけれども、この53%が知らないというのはどういう感想をお持ちでしょうか。

○五藤委員

私は薬円台公民館の担当で、公民館のコーディネーターをさせていただいています。今、薬円台公民館は休館になっているんですけども、毎年、去年もおととしも夏休みに、木の端っこで船をつくったり車をつくったりというのを最寄りの小学校に案内しています。そうすると、安いし、何年生以上は一人で来ても大丈夫というのがあって、催し物によっては人気があります。それから、周りの小学校に協力していただいていますので、関心を持ってもらっていることに関しては、子供たちも夏休みの一つの面白い体験ということで、木の切れ端から物ができるということはすごく楽しくて、いつも早く満席になります。行きたいということと、やりたいということが一緒になると、全くあれではないのかなというふうには思います。夏休みの行事って大体夏休みの間に子供向けということで、早く用意して早く決まっていたような気がします。

○明石委員長

今のお話をお聞きして、やっぱり小学生、中学生が公民館という言葉で夕飯のときに話し出すと、若いお父さんお母さんも関心を持ってもらえる。一般的に言いますと、どうも公民館というのは60歳以上の方が行くような変な先入観がややもすると残っていますね。幼児、小学生を中心に公民館というのが近くにあるよ、何度も行けて遊べるよ、こうした催しもあるよとPRできないでしょうか。特にこの7、8月の夏休みが一番来ていただくチャンスです。学童がないときは公民館でそういう場を提供してくれれば親も喜ぶ。公民館担当の主事さんたちが子供たちにどんな情報を提供しているか、もう少しターゲットを絞ってやっていただくと、いいかなという感じがしております。

水野さん、何か。

○水野委員

やっぱりちょっと発想を変えていかないと同じ話を毎年することになってしまうので。公民館に来させるのではなくて、公民館を日常に取り入れる。まずこれが一つの案だと思うんですね。朝起きて顔を洗うように、朝起きたら公民館がある。リアル公民館に行くのは最終的なゴールであるという一つのストーリーをつくったとすると、常に僕たちは公民館が日常の中に、目の前にあるようにするにはどうするか。

例えば、車を買おうとしたとき、今度はちょっと明るめの車にしてみようかな、思い切って赤い車を買おうかなと思ったときに、明日から日常が赤い車だらけになります。それは今まで気にしていなかった赤い車が気になるからです。この心理ってすごく安く簡単に使えるから、やはり日常に公民館。それをどうするかというところも一つなのかな。

僕たちが一步外に出れば、国がきれいに道路をつくってくれて整備されている。これは当たり前なんだけれども、その当たり前の中に公民館を入れていくというところを、何か市の施策として入れられたら。

例えば、僕はボランティアセンターの運営を八千代市で先日までやっていたんです。そうすると学生さんが結構来んです。学生さんは必ずボランティア証明書を取りにきます。これは単位になるので。そこには単位が欲しい、ボランティアでいいことをしたいというパッションがあるんですよ。日常の中にパッションを取り入れるのは難しいかもしれないけれども、とにかく日常、あと、人が動くためのパッション、この2つにどうアプローチするかだと思いますね。話がそれましたが。

○明石委員長

非常に大事なご指摘です。例えば子供たちの生活のリズムの中に公民館が当たり前に入ってくるような仕組みづくりをどうするか。今はもう非常に衰退しましたがけれども、40年ほど前までは夏休みの最初の1週間はラジオ体操があるのは当たり前だった。学校は休みだけラジオ体操に行くのが当たり前で、はんこを押してもらって、何かご褒美をもらえそうだと、そういうふうに組み込んでいく。お祭りも大事だけれども、日常生活の中に公民館という存在を知るような仕組みづくりを今後考えていきたい。ありがとうございました。

辻先生、どうでしょうか。社会教育の仕事を市民に知ってもらうにはどうしたらいいかという。

○辻委員

ありがとうございます。この53%というのは果たして高いのか低いのかというのを考えたときに、もちろん0%にするのは現実的に不可能なので、じゃあこれがどうなのかと考えたときに、前回委員会の地域別の集計資料が今ちょっと手元を探して見つかったんですけれども、やっぱり地域差があるんですね。例えば高根台とか八木が谷では知らなかった人が36~40%ぐらいで、60%以上の人は知っているんですね。逆に、高根・金杉とか新高根・芝山は、65%の人が知らなかったと答えていて、知っていた人が34%ぐらいにとどまっていて、

同じ市内でも地域によって多分2倍ぐらいこの差がある。じゃあ、船橋市内で実現できるこの「知らなかった」のパーセンテージはどこなのかというと、実際に実現できているこの36%ぐらいにまでは下げられるのではないかと、そういう見込みを立てることができるのではないかなと思いました。

では、実際に36%を達成している地域が、具体的にどんなことをやって多くの人に知れわたっているのかといったことを地道に調査すれば、もしかしたらそこにヒントがあるのではないかと考えました。知っていた人が多い高根台とか八木が谷とかでどんな特徴があるのか、もしご存じの方がいらっしゃったらぜひ教えていただきたいなと思いました。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、ちょっと事務方、資料6の説明をしていただけますかね。資料6の館長の経験年数が横軸で、参加人数が縦軸ですよ。

○社会教育課長

はい。

○明石委員長

そうすると、松が丘とか高根台とか北部とか薬円台、小室、浜町は結構参加者が多いよね。

○社会教育課長

はい。

○明石委員長

八木が谷、三田というのは、館長さんの経験年数が長いのに何で参加者が少ないか。こういうデータが出ていますけれども、これは非常に貴重なデータなので。

課長、分かりますか。松が丘とか高根台とか北部とか浜町とか薬円台というのは参加者が多いんですよね。

○社会教育課長

はい。それでは、資料6の説明をします。

○明石委員長

それから、6の(1)と(2)の意味。

○社会教育課長

はい。今、委員長からお話がありましたけれど、資料6は、令和8年3月23日に開催した令和7年度第3回船橋市生涯学習基本構想・推進計画検討委員会において、明石委員長より公民館のキャリアと公民館の活性化についてご質問をいただきましたので、調査させていただきました。船橋市は公民館が26ありまして、各館で状況が違うということを調べて載せていますので、ここで説明させていただきます。その後、これらの議論をしていただいて、なかなか解決するのは難しいところもありますが、先ほど、辻先生が言われていた公民館の違いというのも、もしかしたら見えてくるのかなと思っております。

それでは、資料6の「公民館長のキャリアと公民館の活性状況について」をご覧ください。

まずは、1 番の「令和 7 年度に在籍した公民館長の職歴」という表でございます。市内に公民館は 26 ございますが、令和 7 年度の職歴なので、令和 8 年 3 月 31 日時点の調査です。令和 8 年度に退職した館長が 1 人いましたので、25 人の館長についての調査になりますが、全員が一般の事務職で、教員の経験者はおりませんでした。それと、公民館長の公民館での平均勤務年数は 5.2 年という結果でございました。

続きまして、2 番、「令和 7 年度の公民館の活性状況と公民館長の経験年数の関係について」でございます。調査するに当たり、公民館の活性状況は、各公民館における事業や文化祭の参加者数を公民館の対象区域の人口で割り、人口 1 人当たりの事業参加者数を算出したものでございます。まず対象区域というものが公民館ごとにあります。これは公民館活動の効果を高めるために、人口密度、地形、交通条件、日常生活圏、社会教育関係団体の活動等を勘案して市が定めております。例えば習志野台公民館でしたら、習志野台何丁目から何丁目とか、区域を定めているものでございます。公民館事業の参加者数をその区域の人口で割ったものを、公民館の活性状況ということで、今回判断をさせていただいております。それと、令和 7 年度中に休館期間である中央公民館、習志野台公民館、塚田公民館と、先ほど言いました公民館長の職歴で確認できなかった二和公民館を除く 22 館について 2 つのグラフを作成いたしました。

まず、1 つ目のグラフ、「令和 7 年度事業参加者数／対象区域人口」でございます。これは縦軸が令和 7 年度に実施した公民館事業の参加者数を、公民館の対象区域の人口で割ったもので、横軸が館長の公民館における経験年数です。縦軸で一番高いのが松が丘公民館になります。松が丘公民館の館長の経験年数は、横軸になりますが 2 年。2 番目に縦軸が高い高根台公民館と、3 番目に縦軸が高い北部公民館長の経験年数は 4 年です。ちなみに、横軸の公民館長の経験年数が長いのは、八木が谷 16 年、三田が 13 年ですが、実は縦軸は高くはないという結果でございました。

次、2 ページをご覧ください。2 のグラフは、令和 7 年度の文化祭の参加者数を対象区域人口で割ったものです。縦軸が、文化祭の参加者数を公民館の対象人口で割ったもので、横軸が、先ほどと同じで公民館長の経験年数です。縦軸が一番高いのは高根台公民館、2 番目が松が丘公民館。縦軸は高いけれど、高根台公民館の館長の経験年数は 4 年。2 番目に高い松が丘公民館と 3 番目に高い小室公民館の館長の経験年数は 2 年です。先ほどと同じですが、八木が谷公民館と三田公民館は横軸の館長の公民館経験年数は高いけれど、文化祭の参加者数を対象区域の人口で割った縦軸が低かったということです。1 のグラフと 2 のグラフも同じような状況でした。

この 2 つのグラフを見てもらうと、多分お気づきだと思いますが、公民館の活性状況と公民館長の経験年数に関係性を確認することはできませんでした。

それでは、ということなのか、この資料にはそこまでは書いていませんが、今回、公民館に対する調査を基に分析してみました。その結果、公民館の事業や文化祭の参加者数の関係に見られた項目としては、公民館の団体利用者数とか、登録している社会教育関係団体が

関係していて、公民館の事業や文化祭の参加者数というのは、日常的に公民館を利用している人数と関係があるものと考えられます。

以上でございます。

○明石委員長

課長、貴重なデータをありがとうございました。大きく分けて、館長の経験年数は関係なく、3つの塊ができていますよね。文化祭と事業参加者数もほぼ同じ塊が出てきておりますから、これをヒントに施策2の知られていないという、普通の生活リズムの中に公民館とか社会教育の事業を知っていただくというか、ルーティン化していく方法をもうちょっと検討しなければいけないかなという感じはございます。一番難しいでしょうけれども。

次に、3番、「地域の拠点としての公民館を充実」、これがこれからのデジタル公民館をつくった場合でも、こういう拠点づくりというのを考えなくては意味がないだろうなという感じがしております。

そこで、中原先生、またすみません。今、中学生、高校生のたまり場が少ない。中学生は部活があるけど高校生のたまり場がなく、それは横浜も東京も今考えているんですよ。船橋市も多分、青少年課で考えていると思いますけれども、公民館が中学生、高校生のたまり場になるにはどうしたらいいかという考えは、どうですか。ごめんなさい、突然振ってしまっ

○中原委員

自由に使えるフリースペースがあって、そこにいろいろな情報が目につくところに貼ってあるとか、さっきおっしゃったようにデジタル公民館、調べたいことがあったら、その中のコミュニティで何でも質問ができるみたいなものも併せて、いつでもいれる居心地がいいところだなというふうに思ってもらえればと。中高生だと地元の友達と集まったり、または自分の高校の近くの公民館を利用したりというふうに、身近にすぐ行ける場所としての認識が生まれるのかなと思います。

○明石委員長

では、栗山さん、お若いんですけども、例えば東京都の中央区では晴海児童館とかをやっていて、中・高校生が増えています。船橋市の場合は児童館がないんですよね。そうすると青少年のたまり場として、26館も公民館があるんだから、中・高校生とか専門学校の学生たちが集まるたまり場として、公民館はどういうことをやればたまり場になれますかね。

○栗山委員

そうですね、自分自身も実際数年前まで中高生という中で考えると、たまり場というか、放課後、友人と会う場所として公民館という選択肢が正直なかったという現実があると思います。実際、多分自分と同じような人間がいっぱいいるからこそ、今このような状況になっていると思うのですが、その中でどうして選択肢にならなかったかというところという、もちろんメリットとして基本的にお金がかからない、集合する分にも、何かしらの時間を消費する分にも、お金がかからないというところがとてもメリットかなとは思っています。

同時に感じたのは、勉強スペースというか自習スペースとして活用していくところとしては、図書館的な使い方になってしまう気がするのですが、とても身近で使いやすい一つの選択肢になるのかなとは思っています。

ただ、自習スペースとして扱う分にはやっぱり静かであることが求められるのですが、中高生が集まる場所として静か過ぎるというのもやりづらいというか、自分たちが集まったらもともといらっしゃる方々、ちょっと言い方が難しいのですが、いわゆるシニア層の方々に対して自分たちが行っちゃうと場違いというか、衝突が起こるとは言わないですけど、迷惑をかけてしまうのではないかという遠慮の心があるんですね。やっぱりそういうところの障壁をなくせないと、中高生にとって公民館というのが放課後の選択肢に入ってくることはないのかなと思ってしまいます。イベントでしか行かない場所というか、日常生活に溶け込む場所には、どうしてもそういうところをやっていかないと駄目なのかなと思ってしまいます。

○明石委員長

ありがとうございました。

辻先生、何かございますか。中高生のたまり場として公民館はどういう機能というか働きをすればいいかというのを。

○辻委員

こういうのがいいのかどうか分からないですけども、無料 Wi-Fi とかはもう大体入っているんですかね。

○明石委員長

公民館は入っていますよね。

○社会教育課長

公民館には無料 Wi-Fi は入っています。

○辻委員

やっぱり今は電波があるところに若者がいるというか、マックで集まってみんなでネットゲームして対戦しているみたいなことをよく聞くので、そういう集まり方を公民館ですることがいいのかどうか分からないですけども、やっぱり一つの条件としては、高速インターネットが整っていること、それに無料で接続できるというのは何かいい仕掛けになるのではないかなと思います。それを活用したイベントかどうか分からないですけど、仕掛けづくりが一つのきっかけになればいいかなというふうに思いました。

○明石委員長

ありがとうございました。

一つは、電子通信のNTTと中央高等学院の千葉校がeスポーツをやっているんですよね。そこまで行かないけれども、不登校気味の高校生たちが、いわゆる普通の高校は嫌だけれども、通信制の教育の場合はeスポーツを通して、半分遊んで半分学びができて単位を取れるというのが、結構生徒が増えているんですよね。ですから、ネットの充実があって、公民館でもそこを通して仲間と交流できるというのがあればいいかなと。

もう一つ、今、政府も困っているのは、中学生、高校生、大学生初期の方の自殺が増えて
いるんですよね。独りぼっちの方が増えている中で、独りぼっちの方のたまり場もできない
かなと。そういう意味で公民館は本当に敷居が低いので来やすいと思うし、あんまり利害が
はつきりしないのでいいかなと。私は、もう一度青少年にとっての公民館を見直してもいい
かなと思っているんですよ。それで質問させていただきました。

どうぞ。

○五藤委員

今の公民館の現状でいくと、例えば私たちが打合せを急にしたいと思って公民館に行っ
ても、部屋を取っていないと場所がないんです。だから、きっと中高生が集まるということに
なると、場所の確保と、全部 Wi-Fi が通っているわけではなくて、ないところも、思うよう
に入らない部屋もたくさんあります。新しいところはあるのかも分らないですが。

まず一番は、場所を提供するとなると職員がいるとか、管理がある程度できるとか、今、
公民館の職員数もものすごく減っているのも、今までみたいに開けてくれて閉めてくれると
いうこともまずないんです。

だから、私たちがそこで何かやるにしても予約が大変で、予約を取って何時から何時まで
みたいなものがあるので、フリーでいつ来てもいいよみたいなことはない。私は公民館をず
っと使っている身として、予約がなかなか入らない、休館があると休館の公民館がよその公
民館で予約を取っているということだから、現状ではフリーで中高生が自由にいつでもみん
な集まってオーケーというわけにはいかない。職員がいなければ、その人たちが来て何をや
っているかということ、「何のために」もとても大事だと思うので、そこら辺をしてからでな
いと、集まれみんなとか、みんな来れば寂しくないよとか、そういうことにはならないよう
な気がしますけれども、現状、安藤課長、いかがですか。

○社会教育課長

ありがとうございます。おっしゃるとおりのところもあると思いますが、今、例えば船橋
市は、全国的にもそうなのかもしれないですけど、すごく温度が高いので、公民館がクーリ
ングシェルターになっています。

なかなか公民館の予約が取れないという実態はありますが、委員長が言うとおりの、クーリ
ングシェルターとか、公民館に気軽に来てくださいと言っています。とはいえ、多分クーリ
ングシェルターとして公民館に来たとしても、ロビーが使用されていたり、部屋も予約が入
っていて使用できないこともあるかと思っています。

あと、若い人が公民館に来ていただくのはありがたいことなのですが、栗山さんが言われ
たとおり、学習室などは勉強している人がいるので、ゲームをして大騒ぎするとあまりよろ
しくないところもあります。公民館側としては、皆様に来ていただきたい身近な場所だけれ
ど、確かに制約される部分もあるし、今言われたように公民館職員の人数も減ってきていま
す。公民館によっては空いているところもありますが、立地等により混んでいるところもあ
ります。公民館には、皆様に来ていただきたいという気持ちはありますが、スペースや人員

の問題だとか難しい部分もあります。

そういうことから、今回の計画に「いつでもどこでもだれでも学べる環境の充実」というような、オンラインやオンデマンドを想定して、重点的施策の1を考えました。実は、オンラインやオンデマンドという言葉为重点的施策に入れようと思っていました。先ほど言われたように、オンラインなどで裾野を広げていくのは非常に大事なことだけれど、公民館は、対面により昭和生まれの方と交流するとか、世代を超えたコミュニケーションを取る場所でもあります。単純にオンラインなどを想定するだけでなく、選択肢を広げて、オンラインで学びたい人はオンラインで学ぶ、オンデマンドで学びたい人はオンデマンドで学ぶ、でもやはり対面での人と人とのつながりも大事なので、公民館で学びたい人は公民館で学ぶ。学ぶ気持ちがある人はできるだけ公民館を活用していただく。そういうことで、「いつでもどこでもだれでも学べる環境」を重点的施策1に掲げさせていただきました。

今もいろいろなご意見をいただいております、公民館には問題のあるところもあるのですが、船橋市の26の公民館職員は、全て市職員です。ほかの市だと指定管理者が運営している公民館もありますが、船橋市の誇りは、市職員が直営で運営している、なおかつ、社会教育士も各公民館に1人以上はいる。船橋市は公民館に自信を持っているところでございます。指定管理者にしているといろいろな関係もあって、フレキシブルにやりたい事業ができないこともあるかもしれないですが、船橋市の公民館はすべて生涯学習部の職員が運営しているので、横のつながりもあるし、こういう事業をやろうとなったら、話し合い、事業を実施していくという体制になっています。重点的施策3に「地域の拠点『公民館』の充実」を書かせていただきましたけれど、先ほども言いましたように、いろいろな選択肢を持った身近な公民館を充実させていきます。

災害時の避難所に公民館はなっています。この前、船橋市で特別警報が発表されて、公民館に200人以上の方が避難されました。今回は、急に雨が強くなって、昼夜問わず対応した公民館職員が何人もいて、避難された方を受け入れていました。緊急時に、避難所としての身近な公民館も、やはり市職員が運営しているから、あれだけのことができたと思っています。

皆様から様々な意見をいただいておりますし、私たちも重々承知していますので、今回はこの3つの重点施策を進めていきたい、もちろん計画に書いて終わりではないです。この計画を市として一丸となって、公民館職員も社会教育課の職員も一緒になって実施していきます。今回は骨子案という形で示させていただいて、これを次に素案として、肉づけしたものを皆様にお示しします。後期推進計画期間は5年間ありますので、今回皆さまに考えていただいた計画に沿って、事業をしっかり行っていきたいと思っていますところでございます。

○明石委員長

ちょっと水野さん、教えてほしい。考えて知恵が欲しいのですが、この3番目で、社会教育関係団体の参加者が減っているんですね。例えば子ども会の育成者が減ってきている、PTAの役員のなりてが減っているし、青少年団体のボーイもガールも含めて、いわゆる地

域を担ってきた方々の既存の団体が、育成者を含めて減ってきているんですよね。やっぱり人材育成をやってこなかった。ほかの業種もそうでしょうけれども、今後、こういう地域の社会教育関係団体の人材育成はどうすればいいか、何か水野さんなりの案がありましたらお願いします。

○水野委員

このⅡの①「地域・社会で活躍する人材・団体数」というところの「例年減少」というところです。これはデータの取り方の問題もあると思いますけれども、むしろ今は団体をみんな簡単につくる時代になっていると思います。ネット上でつながって、ネット上の団体というのはものすごく多い。ボランティア団体も、災害ボランティアは私がやっている絡みで来るところも全国組織で、あるところは有名になって私どもも検索できるんですけど、結構、船橋市内にもボランティア団体、グループとして活動している人がいます。

今までは市のほうで把握できたというのは、届出をしていたり借りたりする人たちなんですけど、例えば有事の際にしか集まらないボランティア団体も結構あるんですよ。そういったものをカウントできていないというところと、あと、プチ団体化してきているというところは、ここで把握できていないところなのかなと思います。だから、そこをあまり話してもあまり意味がないのかなと。ごめんなさい、私は最初からこの話を軽視していたので。

それよりも、今、安藤課長の話を聞いて、やはり市のほうとして指定管理をして、公民館がまとめられているなという安心感を得るとともに、先ほど栗山さんから話を聞いたように、堅苦しいだとか、そこに行っちゃいけないというところが、もろに安藤さんの話から出たので、ここかなと。市の管理がいいのですが、私も53歳になって安心できていいなと思うんですけど、やっぱり若いときにはそれが結構面倒くさいなとか、ちょっと行きづらいなというところがあったんだと思います。堅いところで安心感をつくってくれているのは大事なんですけど、そこかなと。

やっぱり五藤さんが言われたように、来るのが大変、予約するのが大変。そんなもの今デジタルの社会なんだから、バーコードで鍵を開けるだとか、いくらでも借りられる設備ってあると思うんです。そういったものから始めていかないと、予約が取れないから駄目、入りづらいから駄目。だったら入りやすく予約を取りやすくするという方向に今すぐシフトするべきかなと思います。

○明石委員長

そういう意味でもう少し、これからの変わっていく公民館の在り方も新しい時代に対応した施策をしなければいけないかなという意見がありました。

では、草野先生、全体を含めて何かご意見がありましたらお願いします。

○草野委員

重点施策が3つあるわけですけども、それ以外にも大事なところがたくさんあると思います。

私が非常に重要だと思っているのは、基本施策の1番目、「社会的包摂の実現」というと

ころです。これは非常に重要なテーマだと考えています。青少年の問題に関しても書かれていますけれども、つい最近、「学校のメンタルヘルス」という本が出て、私読んだのですけれども、先ほど若者の自殺という話もありましたように、若者たちの現状というものの非常に危機的な問題が取り上げられていまして、不登校が 30 万人を超えているとか、いじめの問題、暴力の問題、そういうことが取り上げられていたわけです。スクールカウンセラーを長年やってこられた方が書いていた本ですけれども、そういう青少年、若者たちの今の非常に過酷な実態というものを踏まえた形で、こういう課題、青少年の豊かな心の育成のための学びをどういうふうにしていくかということは、船橋市も大変深刻な問題を抱えてはいると思いますけれども、そういう青少年の現状というものに根差した形のこういうテーマの追求ということを、ぜひやっていただければと思います。

それから、施策の 2 番目のところ、「持続可能な社会を目指した学び」というところがありますけれども、これも非常に重要なテーマだと思います。先ほどのデジタル社会、AI の問題が出ましたけれども、その AI とどういうふうに我々人類が関わっていくかというテーマ、あるいは、4 番目に「環境に関する学び」というのがありますけれども、つい先日もネパールで氷河が溶けて、それが滑落をして大変な災害になっているというニュースがありました。それから、今年もここ千葉でもそうですし、福井とかそういうところで、かつてない、本当に 1 万年に 1 回あるかどうかというような大変な災害があったということで、急速に環境の問題というものを、大げさに言えば人類の未来に関わる問題として考えていくべきこととして出ているように思います。

そういう環境の問題、あるいは AI の問題、あるいは近年の平和をめぐる問題ですね。そういう中で、大げさな言い方ですけれども、人類の未来に関わるような深刻な問題が現在出てきているんだということを少し押さえつつ、この施策の 1 番、2 番に書いてあるテーマをぜひ深めて追求していければと思います。

あとは公民館のお話が最後のほうでちょっと出てきたと思います。重点施策の 3 番に、「地域の拠点『公民館』の充実」ということがありました。先ほど安藤さんのお話にもあったように、船橋市が大事にしてきた公民館の運営の在り方ですね。戦後 80 年、公民館の歴史があるわけですけれども、その中で船橋市が追求してきた公民館の様々な取組、そして船橋市の市民の方たちが築いてきた生涯学習、社会教育の実践の積み上げというものがあると思います。そういう歴史的な船橋市の築いてきた、いわば市民文化といいますか、これは非常に貴重なものだと思うんですね。船橋市がこれまで歴史を通して積み上げてきた遺産というか、地域の文化あるいは社会教育、その遺産というものを評価しながら、それを土台にした取組、それが大変重要ではないかと考えています。

もちろん、従来のそういう発想ではなく、新しい発想の下で考えていくということも大変大事だと思いますけれども、一方でそういう歴史に根差すというか、これまで築いてきた遺産、財産というものを正當に評価しつつ、それを継承する、その中で新しい未来を開いていくというふうな、そういう視点も欠くことができないのではないかと考えている

というところですよ。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、栗山さん、全体的に何かご意見ありますか。ありましたらお願いします。

○栗山委員

先ほども言ったとおり、僕として感じている部分としては、どうしても若い世代にとって、きちんとした感じの市が運営するイベントであったり施設であったりの隔たりという部分になってしまうのかなと、そういうところにとっても課題を感じています。

あとは、デジタル化という部分において、デジタル化、デジタル化と言っていく部分で大事にしてほしいなと思うところとしては、ただただデジタル化したら若者が集まるとかみんなが使いやすくなるというわけではないのかなと。やっぱりデジタルにするにしても、難しいのですが、デジタルだけでは出せない良さというところもあると思うので、そのところも大事にさせていただけるとうれしいかなというふうに思っています。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、辻先生、何か全体的に意見がありましたらお願いします。

○辻委員

ありがとうございます。資料3の後期推進計画の体系で、施策1が「社会的包摂の実現に向けた学び」で、施策2が「持続可能な社会を目指した学び」という整理は、まさに時宜を捉えたというか、この先5年、10年を見据えた適切な施策だというふうに改めて感じました。

その中身の施策2の1番の「人権尊重のための学び」という記載が、この上の施策1そのものというか、重複があるのではないかなと感じました。結局はこの施策1が全て達成できれば、結果的に人権尊重のための学びになると感じましたので、ここはちょっと整理ができるのかもしれないと思いました。全体としてはいい方向でまとまっていると感じています。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、中原先生、全体的に見られて何かご意見がありましたら。

○中原委員

公民館の事業という一番地域に根差しているところで、幼稚園児から高齢の方までみんなで学習していく、学びたいことを学んでいくという世界をつくるということから、私が感じたことは、対象の年齢が広いなという、それぞれがそれぞれの課題を持って、それぞれの生活があって、その子たちが同じように学びたいところで公民館に行くというのは、ちょっと望み過ぎている部分なのかなとも思うので、まず対象を決めて、そこから広げていくということも大事な視点なのかなと思いました。

学校のほうは学校のほうで公民館の在り方を学習していく中で、総合的な学習の時間のないようも変わってきておりますので、そういうところで子供たちに広げていければというふ

うに今日参加して感じたところです。ありがとうございます。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、五藤さん、最後に全体的に見られてご意見がありましたらお願いします。

○五藤委員

ありがとうございます。私自身も思ったことは、お話をいろいろしていく中で、どこでも誰でもというのはとても大事だと思うし、だからといってオンラインやそういうことに走って、そればかりでいいのかというところで違いうし、公民館に来ていただきたいというのはもちろんそうなんだけれども、公民館にみんなが来れるかというとまた別の問題になるので、今お話しされていましたが、誰をとということとはとても大事なのかなと。

30代も70代も小学生も中学生も来てもらいたいというと、なかなか難しいのかなと思うので、例えば土日がすごく混んでいる公民館なのか、平日だったら空いているというのか、夜だったらいいよとか、利用する側としたら、この時間に来るとゆっくり話せるよというのも大事なのかなと思います。

いつも満室なわけではないと思うので、その辺も今日のお話の中でターゲットを絞るといえるのか、この公民館の特色は何なのだろうと、地のりみたいなこともありますよね。薬円台は何がいいかといったら駅から近い。そういうのはすごくいい。不便なところだとなかなか行かない、車がないと行けないとかいろいろあると思うので、そういうことも含めて、もう少し公民館独自の何をというところも考えていくべきなのかなと感じました。

○明石委員長

ありがとうございました。

では、水野さん、全体的に見られて。

○水野委員

今の五藤さんの話の中で出たように、公民館のカラーを出したいというのが私もずっと思っていて、船橋に26もあるのであれば、この辺の行政の中では多いほうだと思うんですよ。それを生かしたやり方、やはり防災館をつくるとか、交流館をつくるとか、今、外国人も多いので、テーマをつくっていく。一日館長を募集してみる。公募で館長を募集してみて、いろんな趣味の団体があると思うんです。そういった人たちに、例えば登山館でもいいし、いろんな趣味に直結するようなカラーを出していくこともありなのかな。登山のことを学びたかったら薬円台に行けばいいとか、そういったところにも行きたいとは思っているんですけど、それはずっとデジタルで市のほうから学びながら、最後に薬円台公民館にたどり着くというストーリーを何かでつくれたら、少しは客寄せになるのかなと。客寄せ目線で考えるとそうなりますね。

○明石委員長

非常に貴重な意見ありがとうございました。

私個人も、人生100年時代で、学校教育は例えば22歳までで考えると人生の4分の1が

学校教育なんです。あとの4分の3は社会教育なんです。それだけ幅広いんですよ。そうすると、自宅ではネットで学ばんです。生成AIで解決する。でも何かそれでは足りないんですよ。やはりそこでぶらりと立ち寄って困り事を相談したり、どうするかという対面の言葉かけとか交流、そういうことをするのが公民館かな。そこでまた新しい問題をもらって、また新しい学びをしていく。だから、公民館が終着ではなくて、あくまで手段なんだけれども、多くの方が学校とは違った意味で、人種のるつぼではないけれども、いろんな方が集まってがやがや議論する場だと思います。

今、例えば小学校、中学校の給食で、多分船橋もみんな前を向いて食べているんですよ。グループで食べるのを東京はもうやめているんですから、コロナ以降。グループで話すというコミュニケーション体験がものすごく減ってきている。社会人はマックでもみんな外の窓を見て独りぼっちでコーヒーを飲んでいるんですよ。言うならば、ある集団でお互いがしゃべっていくという場が極端に言いますと減ってきてしまっている。そこでやっぱり絆つくりとかつながりづくりというのは、最後は公民館という場をうまく活用して地域の絆をつくってくれるといいかな、そういう期待がある。

最後にぜひ事務方をお願いしたいのは、デジタル公民館というのを、中身は皆さんで議論してほしいんだけど、26館あれば1館くらいつくってもいい。皆さんおっしゃるように、それぞれの持ち味の交流館でもいい、防災館でもいい、何かご自分の特色を出していただくといいかなという感じをいたしております。

今日は本当に貴重なご意見いただきましてありがとうございました。

では、次はその他ですけれども、何かその他がありますか。

○社会教育課長

すみません。本当は公民館長の職歴と公民館の事業参加者をここで説明しようと思いましたが、先ほど説明させていただきました。ありがとうございます。

今も意見をいただきましたが、公民館長の職歴と事業参加者などの調査をしているときに、公民館それぞれの強みと弱みがあり、その辺もいろいろ調べました。例えば、松が丘公民館で、数値が高かったところはなぜ高いかというと、松が丘地区は地域的に高齢者の数が多い公民館でございます。やはり高齢者が多い公民館は高齢者向けの事業を行ったり、高根台公民館も数値が高かったのですが、駅に近いから、ふらっと立ち寄れるような事業を行ったり、駅から遠いけれど駐車場がある公民館は、車を使用している人をターゲットにした事業を行なっている。やはり各公民館においても、それぞれ地域の特色というのは分かっている、それに応じた事業を実施して、人を集めているという実態もあります。しかしながら、参加者数が多いところ、少ないところもあり、駅から遠くて、駐車場も少ないとか、なかなか人を集められない。参加者は少ないけれど、その中でも特色を持って事業を行っているので、本日、皆様にいただいたご意見も公民館に伝えながら、この計画に沿って事業は進めてまいりたいと思います。ありがとうございました。

○明石委員長

では、以上をもちまして、令和８年度第１回船橋市生涯学習基本構想・推進計画検討委員会を終わりたいと思います。

次回は１０月７日の午前１０時から、この場所で行いたいと思っております。

本日はどうもありがとうございました。

午後３時１５分閉会

９ 資料・特記事項

別添のとおり

１０ 問い合わせ先

船橋市生涯学習推進本部事務局（教育委員会生涯学習部社会教育課）

電話：０４７－４３６－２８９５